

BOOK REVIEW

くすりのかたち外伝

化学構造式で わかる! 使える!
まいにち薬会話 薬理編

著: 浅井考介・柴田奈央

「化学構造式って薬剤師の業務に必要ですか?」

本書を開くと第1章のタイトルがこの言葉になっています。有機化学は大学時代にすべての薬剤師が履修しますが、「臨床で必要?」と聞かれて胸を張って「必要」と言えるほど活用できている人は多くないのではないでしょうか。実際、大学時代に有機化学の研究をしていた筆者も、臨床で化学構造式を知る必要性に迫られることはありませんでした。

そんななか、「化学構造式×薬理」と銘打った本書は何を教えてくれるのだろうか?と興味をもち、第1章を読むと「ナウゼリンにアレルギーのある患者にアリセプトが処方されたら?」という問いかけがありました。何の関係があるのかと読み進めると、アリセプトの添付文書には「ピペリジン誘導体に対し過敏症の既往歴のある患者」への投与が禁忌と書かれており、ピペリジン構造をもつナウゼリンにアレルギーがある場合、アリセプトが投与禁忌である可能性があるとのことでした。

「なるほど、面白い! だったらシステムに頼ればいいじゃないか」と思い、アレルギー薬にナウゼリンを登録したうえでアリセプトを処方してみました。残念ながら某社の電子カルテ、調剤支援システムではアラートは発出されませんでした。禁忌事項に一般名ではなく構造名が書かれている場合、システムで防げないなら自力で構造式を確認しなければいけない…。無知とは恐ろしいものだと思えてきました。

監査・調剤をする薬剤師にとっては恐ろしい話ですが、皆さんはピペラジン誘導体をもつ薬を何か思い浮かべることができますか? 手元にあるアレルギー情報と



B5判 / 128頁

定価: 2,200円 (本体 2,000円 + 税 10%)

発行: 南山堂 (2025年12月)

化学構造式をリンクさせることができますか? 本書は薬剤師が頻繁に目にする薬をとりあげ、日常業務で起こりうる事例を題材にしながら「化学構造式=薬の本質」であることを教えてください。上記の事例以外にも構造による選択性の違い、構造類似による併用禁忌の考え方など、目から鱗の内容ばかりです。

備えあれば憂いなし! 有機化学の知識で武装すべく、すべての薬剤師に読んでほしい1冊です。

名古屋セントラル病院 薬剤科 薬剤長 坂野 昌志